

# 上条

## 報告

第25号

平成23年6月

甲州市教育委員会  
☎32-5097

### 世界的にも珍しい、 甲州市所在の貴重な絵画

甲州市大和町木賊に所在する臨済宗建長寺派の古刹・天目山栖雲寺は、中国・元に渡り修行した業海本浄（ごつかい・ほんじょう）禪師が、貞和四年（一三三八）に開いた寺です。ここには、禪師が修行した杭州天目山幻住庵の普応国師を彫った重要文化財の坐像をはじめ、県指定文化財十一件、市指定文化財二十件があり、その保存のよさに驚かされます。

その栖雲寺に、今世界が注目している絵画がありま  
す。「虚空蔵菩薩画像」（こくうぞうぼさつがぞう・市指定）です。



栖雲寺蔵 虚空蔵菩薩画像



虚空蔵菩薩画像 部分

この絵画の大きな特徴は、左手に蓮華台座付きの十字架を持つていることです。そのため長い間この画像は、大和へ配流・処刑されたキリシタン大名・有馬晴信の遺品、あるいは肖像画と伝えられてきました。

ですが、平成十八年に東北大学教授の泉武夫先生が発表した論文で、この絵画はキリスト聖像である可能性が指摘されました。金泥を多く使っているなどの細かな考察から、描かれた時代と場所は、元時代（一二七一〜一三六八）の中国で、業海禪師が修業していたのと一致します。

中国に伝わったキリスト教はネストリウス派という異端視された一派で、「景教」と呼ばれていました。七世紀の唐の時代に伝わったとされますが、その時々権力者により弾圧と復興を繰り返し、元時代には信者が大勢いたことが、考古資料から推測されます。

先の泉先生の論文は、礼拝の対象としてキリスト像を、仏画の形式や表現法を用いて描いたものではないかと推測しています。

もう少しこの絵画を細かくみてみましょう。

台座の上に蓮華座が置かれ、その上に安座する姿は、まさしく仏画そのものです。尊顔の背後に光背があります。その外側に消された楕円の光背があり、二重の光背だったことがわかります。さらにその上部には天蓋も描かれていましたが、外光背と同様に消されています。

尊顔の表情をみると、細くつり上がった目にやや扁平な鼻など、実在の人物を思わせます。

左右の肩から三筋ずつ垂れているのは髪です。その髪の毛の先端近く、両肩の下方に着衣の柄と思われる四角い朱色の枠が描かれており、この四角は両膝の外側にも描かれ、四カ所に認められます。四角の枠内には宝冠を戴いた人物像の頭部が描写されており、有馬晴信がヨーロッパへ派遣した天正遣欧使節の四少年を表しているとの説もありました。

実は、この四角い枠が絵画の性質を語る上で大きな意味をもっているのです。

この絵画が注目されたのは、昨年の九月から今年の一月まで、ニューヨークのメトロポリタン美術館へ出品されたためです。美術館では、元時代の中国美術に関する展覧会を企画するにあたり、泉先生の論文に目し、栖霞寺に出品を依頼しました。その時の絵画のタイトルは「十字架をもつ景教人物画」でしたが、展示会準備中に急速に研究が進み、「景教ではなくマニ教画像ではないか」という説が生じ、今ではマニ教画像という考え方が広まっています。

左の絵画は、奈良県にある大和文華館所蔵の「六道図」で、名が示すとおりこの絵画も仏画として認識されていましたが、栖霞寺の虚空蔵菩薩と比較すると、驚くほど共通点が見つかります。

この絵画は、中国・トルファン（敦煌）出土のマニ教絵画断片と類似することから、世界的にも珍しいマニ教絵画と判明しました。

下の写真は、両絵画を並べたものです。二重に巡る光背や、両肩から垂れた髪、着衣のひだ、蓮華台座の



大和文華館蔵 六道図

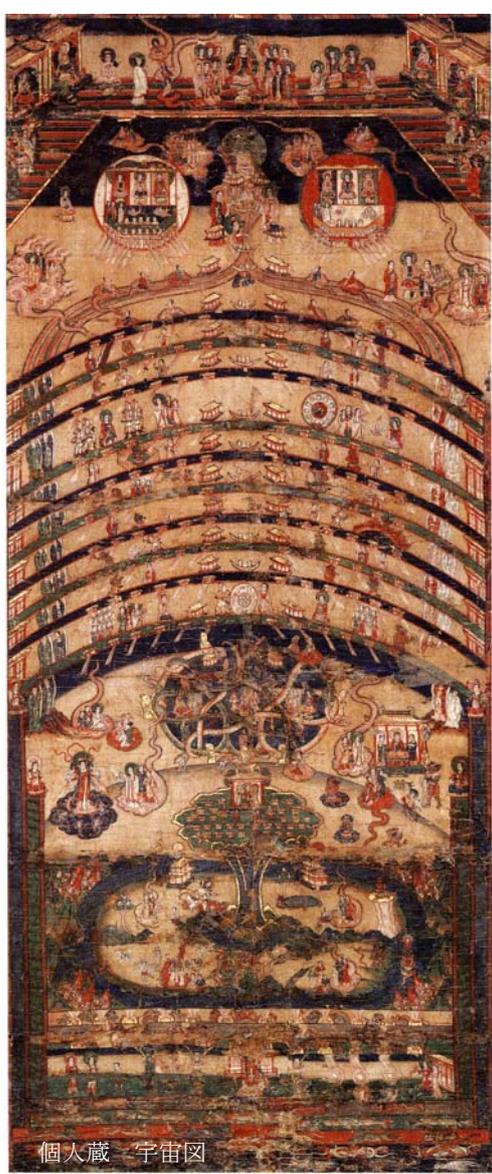
平面的な描き方など、共通点を挙げたらざりがありません。注目は六道図にも着衣に朱色の四角い枠があることです。



虚空蔵菩薩 尊像



六道図 尊像



個人蔵 宇宙図

上の絵画は、昨年発見されたマニ教の宇宙観を表したもので、マニの教義に記されている内容と一致します。マニ教絵画は日本で7点が確認されていますが、その7点が世界で確認されている絵画のすべてなのです。元時代に描かれたという共通点も注目されます。

この四角は「セグメンタム」と呼ばれるマニ教僧侶の服装にみられる特徴で、栖霞寺の絵画もマニ教絵画であるという根拠の一つとなっています。マニ教は景教と同じ頃に中国に広まりました。仏教・儒教・道教、さらにキリスト教など、既存の教義を取り入れているため、「マニ（教祖）以前の預言者としてのキリスト画像」という解釈が成り立つそうです。

私たちの生活する甲州市に、世界的に議論されている文化財が所在するのは、大きな誇りでもあります。